

# 日本語の話し言葉についての研究

## — 縮約形を中心に —

アグス サドリアンサ

はじめに

インドネシアの大学で日本語を3年間学び、去年(1994年10月)、来日のチャンスがあり、今広島大学で日本語日本文化研究生として勉強している。インドネシアで学んだ私の日本語は大体日本でも通じる。しかし、使えることは使えるのだが、困難になり、問題も出てきた。それは、私が勉強していた日本語は大体が日本語の書き言葉、標準語の日本語ばかりであった。一方、話し言葉はあまり勉強していなかったせい、最初は日本人とコミュニケーションするとき、言葉がなかなか聞き取りにくかったのである。テレビドラマやコマーシャルなど、次のような話し言葉がよく出てくる。「あっという間に食べちゃった」「昔のこと忘れなあかんよ」「わからんから、もう一回呼び出してやってみ...」。これらの言葉づかいは書き言葉ではなく、話し言葉独自のものであり、しかも書き言葉の縮約形が多く含まれている。従って、どのような書き言葉が縮約されたのかを調べてみる必要がある。もちろん、この問題は他の留学生、つまり、はじめて日本に来られた方も例外ではないと思い、この話し言葉における縮約形を研究テーマとして選んだ。

今回のレポートでは、インドネシアの教科書の日本語を提示し、現代共通語の話し言葉(資料としてテレビのシナリオ)と比較して研究しようと思う。それによってこのレポートが現代日本語の話し言葉の理解のために、外国人に役立てばよいと思う。

### 1. インドネシアの教科書の日本語

インドネシアの大学で使っている教科書の日本語はいろいろあると思うのだが、このレポートではバンドン教育大学の日本語教科書(日本語中級Ⅰ、国際交流基金日本語国際センター1990)、つまり私が使った教科書を取り上げる。そこには次のような例がある。

#### 大学の国際化

国際化という言葉が最近よく聞かれる。この言葉の概念はそれほど明確なものではないが、その要素の一つとして、情報が国と国の間で相互にかつ同程度に流れる、ということがあげられるとするなら、日本が国際化するためには、外国へ出て行く情報を多くする必要がある。情報に関しては、今まで圧倒的に入って来るばかりだったからである。例えば

ニュースでも、ファッションでもそうだったし、また研究・教育の分野でも輸入超過だった。現在、政府は、21世紀までに留学生を10万人にするという計画を持っているようであるが、日本の大学の国際化という意味では一応歓迎すべきものであろう。

しかし、その方向はともかく、留学生の受け入れの現在を考えると問題は山積していると言わざるを得ない。例えば、留学生宿舎の不足というような施設などの問題もあるが、日本での学位取得の難しさとか、あるいは卒業しても適当な就職口がないというような社会体質等、もう少し根の深い問題もある。国際化のためには、まず初めにこのような問題を見直すことが必要なのではないだろうか。

以上は、教材の一つの例であるが、全て典型的な日本語の共通語としての書き言葉が使用され、我々はこのような日本語を学習してきたのである。

## 2. 現代共通語の話し言葉

現代の日本人が実際の共通語で会話をしている言葉は上のインドネシアのテキストに書いてあるものとは大変異なっている。その実態を明らかにするためにテレビのシナリオに出た言葉づかい、つまり話し言葉の例を取り上げたいと思う。テレビのシナリオは『ふたり』（桂 千恵、NHK エンタープライズ1991）を使って調査した。

調査した結果を整理して示してみると次のようになる。なお各用例に標準的な書き言葉を並記した。

### 2.1. 助詞の脱落形

#### 2.1.1. 目的格助詞「を」の脱落の例

- 「そんなことしちゃいけない」  
「そんなことをしてはいけない」
- 「何いってるのよ」  
「何をいっているのよ」
- 「何しているの？」  
「何をしているのか」
- 「じゃ、二度とそんなこと言わない？」  
「では、二度とそんなことを言わないか」
- 「やめなさい！ そんなことして」  
「やめなさい、そんなことをして」
- 「あなた、じゃどうしてラブレター持ってるわけ？」  
「あなた、ではどうしてラブレターをもっているわけか」
- 「あのロビーでコーヒー飲んだんだ、去年姉ちゃんと」  
「あのロビーでコーヒーを飲んだんだ、去年姉ちゃんと」

- 「そんなこと思ってない、ほんとだよ！」  
「そんなことを思ってない、ほんとうだよ」
- 「ちょっと、金貸してくんない。返すから」  
「ちょっと、金を貸してくれないか。返すから」
- 「でも、それ着るとお姉ちゃんそっくりだね」  
「でも、それを着るとお姉ちゃんにそっくりだね」

### 2.1.2. 係助詞「は」の脱落の例

- 「あたし、役を降りた方がいいんじゃないでしょうか」  
「わたしは役を降りた方がいいのではないのでしょうか」
- 「それ姉です。きっと、あたしと一緒にきてたんです」  
「それは姉です。きっと、わたしと一緒にきていたのです」
- 「俺、来週から二年間インドなんだ。帰るまで考えといてくれないか」  
「俺は来週から二年間インドなのだ。帰るまで考えておいてくれないか」
- 「わたし、つかってなったの。何も役を貰えなくて、だからあんな電話しちゃった」  
「わたしはつかってなったの。何も役を貰えなくて、だからあんな電話してしまった」
- 「君、去年もきてたからな」  
「君は去年もきていたからな」
- 「うちへ電話してくりゃいいのに。番号、万里子の学生名簿に出てるんだから」  
「うちへ電話してくればいいのに。番号は万里子の学生名簿に出てるのだから」

### 2.1.3. 与格格助詞「に／へ」の脱落の例

- 「でも、それ着るとお姉ちゃんそっくりだね」  
「でも、それを着るとお姉ちゃんにそっくりだね」
- 「お手洗いいってくる」  
「お手洗いにいってくる」
- 「どうしたの。今日も学校こないし、電話にも出ないし」  
「どうしたのか。今日も学校に／へこないし、電話にも出ないし」
- 「やだぁ。どこいっちゃったんだろ」  
「いやだ。どこに／へ行ってしまったのだろう」

### 2.1.4. 主格助詞「が」の脱落の例

- 「お母さん。お弁当、ついてるよ」  
「お母さん。お弁当がついているよ」
- 「がんばって。ねえ、テストおわったら今年はどうする」

(4)

「がんばって。ねえ、テストがおわったら今年はどうするのか」

### 2.1.5. 終助詞「か」の脱落の例

- 「こんなに言ってもまだ信用できないの？」  
「こんなに言ってもまだ信用できないのか」
- 「覚えてる？ 千津子が高一の時」  
「覚えているか。千津子が高一の時」
- 「がんばって。ねえ、テストおわったら今年はどうする？」  
「がんばって。ねえ、テストがおわったら今年はどうするのか」
- 「じゃ、二度とそんなこと言わない？」  
「じゃ、二度とそんなことを言わないか」
- 「何しているの？」  
「何をしているのか」
- 「何でそう明るくなっちゃったの？」  
「何でそう明るくなってしまったのか」
- 「いくら待ってんの？」  
「いくら待っているのか」

### 2.2. 音節の脱落の例

#### 2.2.1. 母音音節「イ」の脱落の例

- 「これもお姉ちゃんが使ってた万年筆」  
「これもお姉ちゃんが使っていた万年筆」
- 「食べててくれると思ったのに、みんな帰っちゃうんだもん」  
「食べていてくれると思ったのに、みんな帰ってしまうのだもの」
- 「借りてくね。お姉ちゃん」  
「借りていくね。お姉ちゃん」
- 「お母さん。お弁当ついてるよ」  
「お母さん。お弁当がついているよ」
- 「先生に顔見せなくちゃ。あれっきり電話もしてないし」  
「先生に顔見せなくては。あれっきり電話もしていないし」
- 「コーヒーもいれよう。コーヒーメーカー、きれいになってる」  
「コーヒーもいれよう。コーヒーメーカー、きれいになっている」
- 「お母さんは敏感になってる。気がつかないわけないと思ってた」  
「お母さんは敏感になっている。気がつかないわけないと思っていた」
- 「何いってるのよ」

- 「何をいっているのよ」
- 「何してるの？」
- 「何をしているのか」
- 「お前のことは安心してる」
- 「お前のことは安心している」
- 「だから、きてくれないのかと思ってた」
- 「だから、きてくれないのか思っていた」
- 「あなた、じゃどうしてラブレター持ってるわけ」
- 「あなた、ではどうしてラブレターを持っているわけ」
- 「先生もおっしゃってたじゃないか。なにしろ遅いのばかりのクラスだからって」
- 「先生もおしゃいてたではないか。なにしろ遅いのばかりのクラスだからって」
- 「覚えてる？ 千津子が高一の時」
- 「覚えているか。千津子が高一の時」
- 「あんたをいつも見てるから、がんばって」
- 「あなたをいつも見ているから、がんばって」
- 「それ、姉です。きっと。あたしと一緒にきてたんです」
- 「それは姉です。きっと。わたしと一緒にきていたのです」
- 「君、去年もきてたかな」
- 「君は去年もきていたかな」
- 「わかってるでしょ。わたしの人見知り。ね、黒でキメよう」
- 「わかっているでしょ。わたしの人見知り。ね、黒でキメよう」
- 「お姉ちゃん、出てけば好きなの着て」
- 「お姉ちゃん、出ていけば好きなの着て」
- 「もう、上から下までお姉ちゃんのだけどさ、着てくのはあたしじゃないの」
- 「もう、上から下までお姉ちゃんのだけどさ、着ていくのはあたしじゃないの」
- 「食べててくれると思ったのに、みんな帰っちゃうんだもん」
- 「食べていてくれると思ったのに、みんな帰ってしまうのだから」
- 「ステキ。高校生のくせしてよく持ってたね、こんなの」
- 「ステキ。高校生のくせしてよく持っていたね、こんなの」
- 「じゃ一緒にね。頼んでく」
- 「では一緒にね。頼んでいく」
- 「もしか、あいつに襲われなかったら、ずっと黙ってた？」
- 「もしか、あいつに襲われなかったら、ずっと黙っていたか」
- 「ね。歌ってるでしょ、千津子。昔みたいに」
- 「ね。歌っているでしょ、千津子。昔みたいに」

(6)

- 「万里っぺがさ、コピー取ってクラスメートに配ったんだよ。悪気はなかった、ジークだっていってるんだけど」  
「万里っぺがさ、コピー取ってクラスメートに配ったのだよ。悪気はなかった、ジークだっていっているのだけど」
- 「お姉ちゃん、あたしが神永さんとつきあってるの、焼餅焼いてるんだと思った」  
「お姉ちゃん、わたしが神永さんとつきあっているの、焼餅焼いているのだと思った」
- 「うちへ電話してくりゃいいのに。番号、万里子の学生名簿に出てるんだから」  
「うちへ電話してくればいいのに。番号は万里子の学生名簿に出ているのだから」

## 2.2.2. 「リ」音節の脱落の例

- 「やっばおかしくなったのかもね」  
「やっばりおかしくなったのかもね」
- 「やっば、いく気にならないか」  
「やっばり、いく気にならないか」
- 「ムりないか。この秋からショックなことばっか起こったから、あたしんち」  
「ムりないか。この秋からショックなことばっかり起こったから、あたしのち」

## 2.3. 音声的縮約形（単音の脱落）

### 2.3.1. [o] の脱落

(a) 「の」 > 「ん」 (no > n)

- 「お姉ちゃんの知り合いだったんだって」  
「お姉ちゃんの知り合いだったのだって」
- 「うちへ電話してくりゃいいのに。番号、万里子の学生名簿に出てるんだから」  
「うちへ電話してくればいいのに。番号は万里子の学生名簿に出ているのだから」
- 「お姉ちゃん、あたしが神永さんとつきあってるの、焼餅焼いてるんだと思った」  
「お姉ちゃん、わたしが神永さんとつきあっているの、焼餅焼いているのだと思った」
- 「待って、早すぎるんだよ」  
「待って、早すぎるのだよ」
- 「あのロビーでコーヒー飲んだんだ。去年姉ちゃんと」  
「あのロビーでコーヒーを飲んだのだ。去年姉ちゃんと」
- 「食べてくれると思ったのに、みんな帰っちゃうんだもん」  
「食べていてくれると思ったのに、みんな帰ってしまうのだもの」
- 「ずうと傍にいてくれたんだ」  
「ずうと傍にいてくれたのだ」
- 「時どき夢見る人になっちゃうんだもん」

- 「時どき夢見る人になってしまうのだもの」
- －「それ、姉です。きっと。あたしと一緒にきてんだです」  
 「それは姉です。きっと。わたしと一緒にきていたのです」
- －「そのネックレスに見憶えがあったんだ」  
 「そのネックレスに見憶えがあったのだ」
- －「このロビーでね、第九のことを話しあったんだ」  
 「このロビーでね、第九のことを話しあったのだ」
- －「よかったら、話したいんだ」  
 「よかったら、話したいのだ」
- －「実加。係ごとにわけて撮るんだって」  
 「実加。係ごとにわけて撮るのだって」
- －「すっかり出不精になっちゃったんだから」  
 「すっかり出不精になってしまったのだから」
- －「だからさ、どうしても引き受けて貰いたいんだ。北尾さんに」  
 「だからさ、どうしても引き受けて貰いたいのだ。北尾さんに」
- －「うん。お姉ちゃんだったんだろうか。やっぱり」  
 「うん。お姉ちゃんだったのだろうか。やはり」
- －「ムリだ。低血圧だもん」  
 「ムリだ。低血圧だももの」
- －「万里っぺがさ、コピー取ってクラスメートに配ったんだよ。悪気はなかった、ジーク  
 だっていってるんだけど」  
 「万里っぺがさ、コピー取ってクラスメートに配ったのだよ。悪気はなかった、ジーク  
 だっていっているのだけど」

(b) 「どこか」 > 「どっか」 (koka > kka)

- －「お姉ちゃんなんかどっかへ行っちゃえ」  
 「お姉ちゃんなんかどこかへ行ってしまえ」

2.3.2. [a] の脱落 (ra > r > n)

- －「あたしって冷たいのかなあ。よくわかんないけど」  
 －「わたしといって冷たいのかな。よくわかららないけど」

2.3.3. [i] の脱落 (ri > r > n)

- －「お婦んなさい」  
 「お婦りなさい」

2.3.4. [e] の脱落 (teo > to), (re > r > n)

- 「俺、来週から二年間インドなんだ。帰るまで考えといてくれないか」  
「俺、来週から二年間インドなのだ。帰るまで考えておいてくれないか」
- 「ちょっと、金貸してくんない。返すから。  
「ちょっと、金貸してくれない。返すから。」

2.3.5. [u] の脱落 (nu > n)

- 「起こしてすまん」  
「起こしてすまぬ」

2.3.6. [oi] の脱落 (toi > t)

- 「長野さんから電話あったわ。電話くださいって」  
「長野さんから電話あったわ。電話くさいといって」
- 「どうするって何を」  
「どうするといって何を」
- 「中身は全然って言いたいわけ」  
「中身は全然といって言いたいわけ」
- 「先生もおっしゃってたじゃないか。なにしろ遅いばかりのクラスだからって」  
「先生もおっしゃっていたではないか。なにしろ遅いばかりのクラスだからといって」
- 「お姉ちゃんの知り合いだったんだって」  
「お姉ちゃんの知り合いだったのだといって」
- 「あたしも同然。借金があったって、生きてる方がずっとすばらしいじゃない」  
「わたしも同然。借金があったといって、生きている方がずっとすばらしいではない」
- 「実加。係ごとにわけて撮るんだって」  
「実加。係ごとにわけて撮るのだといって」

2.3.7. [ou] の脱落 (nou > n)

- 「ムリないか。この秋からショックなことばっかり起こったから、あたしんち」  
「ムリないか。この秋からショックなことばっかり起こったから、あたしのうち」

2.3.8. 「てしまう」 > 「ちゃう」 (tesimau > tsimau > tjiu > tjau)

- 「お姉ちゃんなんかどっかへ行っちゃえ」  
「お姉ちゃんなんかどこかへ行ってしまえ」
- 「食べててくれると思ったのに、みんな帰っちゃうんだもん」  
「食べていてくれると思ったのに、みんな帰ってしまうんだもん」

- 「千津子が怒っちゃうぞ」  
「千津子が怒ってしまうぞ」
- 「わたし、つかいっとなつたの。何も役を貰えなくて、だからあんな電話しちゃった」  
「わたしはつかいっとなつたの。何も役を貰えなくて、だからあんな電話してしまった
- 「昔の実加にもどっちゃうぞ」  
「昔の実加にもどってしまうぞ」
- 「すっかり出不精になっちゃったんだから」  
「すっかり出不精になってしまったのだから」
- 「死にたくなっちゃった。あたしも馬鹿だったよね」  
「死にたくなってしまった。あたしも馬鹿だったよね」
- 「前の人と百メートルぐらい離れちゃって」  
「前の人と百メートルぐらい離れてしまって」
- 「今日クラブでしょ。結構暑いから倒れちゃうよ」  
「今日クラブでしょ。結構暑いから倒れてしまってうよ」
- 「ああ。差がついちゃったな」  
「ああ。差がついてしまったな」
- 「それぐらいの苦勞、当然よ。お姉さんのブランドもの、一人だけ着てきちゃって」  
「それぐらいの苦勞、当然よ。お姉さんのブランドもの、一人だけ着てきてしまって」
- 「何よ。嬉しそうな顔しちゃって」  
「何よ。嬉しそうな顔してしまって」
- 「何。さっきからじろじろ人のこと見ちゃって」  
「何。さっきからじろじろ人のことを見てしまって」
- 「時どき夢見る人になっちゃうんだわ」  
「時どき夢見る人になってしまってのだわ」
- 「何でそう明るくなっちゃったの」  
「何でそう明るくなってしまったの」
- 「そのままいっちゃいなさい」  
「そのままいってしまいなさい」

## 2.4. 融合

### 2.4.1. 「には」 > 「にゃ」 (niwa > nia > njā > nja)

- 「たまにゃ忘れ物するわよ。わたしだって」  
「たまには忘れ物するわよ。わたしだって」

## 2.4.2. 「ては」 &gt; 「ちゃ」 (tewa &gt; tea &gt; tjā &gt; tja)

- 「実加ももうそろそろお洒落なくちゃ」  
「実加ももうそろそろお洒落なくては」
- 「あ、そうだったわね。遅くまでご迷惑かけちゃだめ」  
「あ、そうだったわね。遅くまでご迷惑かけてはだめ」
- 「だって、困るでしょ。いつまでもお化けさんがついてちゃ」  
「だって、困るでしょ。いつまでもお化けさんがついていては」
- 「あーっ、マコは見ちゃ駄目」  
「あーっ、マコは見ては駄目」
- 「待ってよ、そんなことしちゃいけない」  
「待ってよ、そんなことをしてはいけない」
- 「出るよ。実加は施主だから動いちゃ駄目」  
「出るよ。実加は施主だから動いては駄目」
- 「実加。そんなことしちゃいけない」  
「実加。そんなことをしてはいけない」

## 2.4.3. 「では」 &gt; 「じゃ」 (dewa &gt; dea &gt; dja &gt; dja &gt; ʒa)

- 「じゃ一緒にね。頼んでく」  
「では一緒にね。頼んでいく」
- 「もう。上から下までお姉ちゃんのだけどさ、着てくのはあたしじゃないの」  
「もう。上から下までお姉ちゃんのだけどさ、着ていくのはわたしではないの」
- 「自分じゃ取れもしないくせに」  
「自分では取れもしないくせに」
- 「お姉ちゃん、死んじゃ駄目」  
「お姉ちゃん、死んでは駄目」
- 「強音吐くんじゃないの。わたしみたいに走って」  
「強音吐くのではないの。わたしみたいに走って」
- 「先生もおっしゃってたじゃないか。なにしろ遅いのばかりクラスだからって」  
「先生もおっしゃっていたではないか。なにしろ遅いのばかりクラスだからって」
- 「あんた、じゃどうしてラブレター持ってるわけ」  
「あなた、ではどうしてラブレターを持っているわけ」
- 「あたしも同然。借金があったって、生きてる方がずっとすばらしいじゃない」  
「わたしも同然。借金があったって、生きている方がずっとすばらしいではない」
- 「じゃ、二度とそんなこと言わないで」  
「では、二度とそんなことを言わないで」

- 「あたし、役を降りた方がいいんじゃないでしょうか」  
「わたし、役を降りた方がいいのではないでしょうか」
- 「来週からテストなのよ。今夜しかいけないじゃない」  
「来週からテストなのよ。今夜しかいけないではない」

#### 2.4.4. 「れば」 > 「りゃ」 (reba > rea > rjā > rja)

- 「わかってりゃいい」  
「わかっていればいい」
- 「うちへ電話してくりゃいいのに。番号、万里子の学生名簿に出てるんだから」  
「うちへ電話してくればいいのに。番号は万里子の学生名簿に出てるのだから」
- 「ホント、馬鹿なんだから。電話でラブコールすりゃこんなドジは」  
「ホント、馬鹿なのだから。電話でラブコールすればこんなドジは」

#### 2.4.5. 「ければ」 > 「きゃ」 (kereba > kerea > kerjā > kerja > keja > kja)

- 「今度、札幌支社でパーティがあつて。どうしてもつけなきゃいけないんで」  
「今度、札幌支社でパーティがあつて。どうしてもつけなければいけないので」
- 「お母さんに電話いれなきゃ。母子家庭はつらい」  
「お母さんに電話いれなければ。母子家庭はつらい」
- 「できないよ。あたし、お姉ちゃんがいなくなきゃ何もできない」  
「できないよ。わたしはお姉ちゃんがいなくなければ何もできない」
- 「いい。あんたがしっかりしなきゃ駄目」  
「いい。あなたがしっかりしなければ駄目」
- 「どうしてあたしがこんな子の次に出なきゃいけないわけ」  
「どうしてわたしがこんな子の次に出なければいけないわけ」

#### 2.4.6. 「いるの」 > 「ん」 (iruno > runo > rno > nno > no > n)

- 「マコ。わたしがおかしくなつたと思つてんでしょ」  
「マコ。わたしがおかしくなつたと思つているのでしょ」
- 「いくら待つてんの」  
「いくら待つているの」
- 「電池が減つてきてんだ。ちょっと待つてね」  
「電池が減つてきているのだ。ちょっと待つてね」

### 3. まとめ

日本語の話し言葉の縮約形は、結局次のようにまとめることができる。

#### 3.1. 助詞の脱落

助詞「を」「は」「に／へ」「が」「か」が脱落する。浅見 徹は「現代日本語では、通常、主格は格助詞「が」を常に要求しているように見える。しかし、その基底には、これら古代からの性格が生き続けていると考えられる。

ボク、本買ったよ。

というような表現が、幼稚にせよ、不整にせよ、ともかく日本語として成立しうるのは、その辿ってきた歴史の中での、「が」や「を」を必須のものとしなかった名残りといってよかろう。」（講座日本語学3、現代文法との史的対照）と述べ、日本語の助詞は多く、古代にはなくて、後に発生定着したと考えている。現代語でもこれらの重要な助詞が脱落するのだ。古代的語の姿が、連綿として日本語の話し言葉の中に生きてきた可能性があるのである。ともかく、話し言葉ではこれらの助詞が非常によく脱落するのが書き言葉に対する大きな特徴である。外国人によく注意する必要がある大きな学習のポイントである。

以上、述べた用例には、目的格格助詞「を」の脱落が10用例、係助詞「は」の脱落が6用例、与格格助詞「に／へ」の脱落が4用例、主格助詞「が」の脱落が2用例、終助詞「か」の脱落が7用例ある。このなかで、目的格格助詞「を」が一番よく脱落すると分かった。これは話し言葉の特徴であり、書き言葉と違って助詞は使わなくても、相手がわかってくれれば問題はないのだといえよう。

#### 3.2. 音節の脱落

母音「イ」が落ちるのは、この [i] は狭い母音であるということが関係していると考えられる。母音をオトを大きく発音しようとすれば、口を大きく開かなければならない。一方、話しているとき、口を開いたり閉じたりしなければならぬと労力が必要であるなら狭い母音がよく落ちる。

「リ」音節の脱落するのはいくつかの単語に限られている。以上の用例では、「やっばり」は「やっぱ」になり、「ばっかり」は「ばっか」と用いられる。

#### 3.3. 単音の脱落

日本語の音節構造は V, CV, CSV, C の4種類がある。この中、「CV」の「V」の脱落の例である。

##### a. 単独で起きているもの

この脱落には [a] [i] [u] [e] [o] の全ての母音について見られる。このなかで一番よく脱落するのは [o] である。

b.重なっているもの

例えば、[iruno > runo > rno > nno > no > n] など。

このように重なっておきている変化は、もとの書き言葉が大きく変化してしまい、もとの形がわかりにくくなっているが、発音上は、短くなっているために省エネルギーになっている。

### 3.4. 融合

融合には色々なケースが見られる。また、脱落と重なって起こっている例も見られる。詳しいことは用例の所で見た通りである。

例えば、niwa > nia > njā > nja, tewa > tea > tjā > tja, dewa > dea > djā > ʒa の場合は、[w]が脱落したのちに[ia]の母音が融合して拗音になったもの。更に長音が単音になった。reba > rea > rjā > rja, kereba > kerea > kerjā > kerjaの場合は、[b]が脱落したのちに[ea]の母音が融合して、拗音になったもの。更に長音が単音になった。

## 4. なぜ話し言葉には脱落や縮約形があるのか

上に挙げたように、多様多様な脱落や縮約形が話し言葉にはよくあるとわかってきた。その一つの原因としてはエネルギー節約、すなわち労力を経済的にする必要から生ずるものである。人間は、ていねい発音することはエネルギーを必要とするものであるから言葉を使いなれてくると、段々いい加減な発音をして来るのが常例である。これが昔からずっと今まで言葉が変化した理由だと思う。例えば、古代後の「御座ある」(goza-aru) が (gozaru)となり「ある」を丁寧に「あります」と言い添えて、「ござります」といっているのだが、段々発音が崩れて、現代語では(gozaimasu)となっている。「今日は」[konni chiwa]が同じ目的を達するためには、手段のはなるべく骨折りの少ない方が選ばれて、現代語では([konnichiwa] > [konchiwa] > [koncha])と用いられるようになった。

すなわち、以上のような音韻変化はそのようにして進行し、音韻変化をさせようなどとはさらに意識することなしに、ひとりでに変化するのである。それは日本語に限られなく、どこの言語でも音韻変化、つまり縮約形や脱落があるはずだと思う。もちろんインドネシア語も例外ではないのだ。例えば、[pergi > pegi]「行く」、[sampai > sampe]「着く」[kalau > kalo]「... えば」、[tetapi > tapi]「しかし」などのような縮約形や脱落がよく見られる。実際のインドネシア語会話の例を取り上げようと思う。

Yulia hanya senyum tertahan melihat adik-adiknya Ida dan Agus yang sedang berduet. Mereka berdua berkurung di kamar. Dan Yulia mengetuk pintu.

"Siapa?", seru Agus.

"Yul"

"Aah, jangan ngganggu dong", kata Agus jengkel.

"Buka dong", kata Yulia.

"Kita lagi rekaman nih", kata Agus.

"Yul ikut dong", kata Yulia.

"Nggak bisa", kata Agus. "Ini duet, bukan trio".

Ida memegang bahu adiknya.

"Biar Yul masuk deh", kata Ida pada Yanto.

Dan Agus membuka pintu. Yulia masuk.

ユリアは妹のイダと弟のアグスが二重唱をやっているのを見て、笑い出したいのをこらえて、ちょっと微笑んだ。二人は部屋にとじこもっていた。ユリアはドアをノックした。

「誰？」とアグスが大声を出した。

「ユリア」

「あーあ、邪魔するのは止めなさい」とアグスがくさって言った。

「開けてよ」とユリアが言う。

「僕たち録音だけ、今」とアグス。

「ユリも仲間に入れて」とユリア。

「駄目だよ」とアグス。「これは二重唱なんだよ。三重唱じゃないんだ」

イダが弟の肩をつかんで言った。

「ユリを入れてやったら、ね」とイダ。

アグスはドアを開けた。ユリアは入った。

以上のインドネシア語の話し言葉には、書き言葉には用いられない言葉づかいが見られる。[ngganggu] は書き言葉に直してみると[mengganggu] となる。この接頭語「meN-」、つまり動作や行為などを表す言葉がよく落ちる。

menguap → nguap (欠伸する)

mendapat → dapat (得る)

mendeheh → dehem (咳払いをする)

menjauh → jauh (遠いざかる)、などである。

なお、感動詞 [dong] [ah] [nih] などのようなものが、話し言葉ではよく見られる。これも話し言葉の特徴の一つではないかと思う。

## 参考文献

1. 国際交流基金日本語国際センター「日本語中級一」凡人社 1990
2. シナリオ作家協会編「'91年鑑代表シナリオ集」映人社 1992
3. 金田一京助「国語音韻論」刀江書院 1943
4. 講座日本語 3「現代文法と史的対照」明治書院 1989
5. 城田 俊「日本語の音－音声学と音韻論」ひつじ書院 19934
6. 国文法講座 6「時代と文法－現代語」明治書院 1987
7. 金田一春彦「日本語セミナー」筑摩書房 1987
8. 松岡那夫「インドネシア語文法研究」東京大学書林 1990
9. 谷口五郎「KAMUS STANDAR BAHASA INDONESIA-JEPANG」Dian Rakyat 1982
10. 水谷修「話し言葉の表現」筑摩書房 1983
11. 新・日本語講座「現代人の話し言葉」汐文社 1975
12. 講座現代語第一巻「現代語の概説」明治書院、昭和38年
13. 講座現代語第六巻「口語文法の問題点」明治書院、昭和39年
14. 堀口純子「会話における引用の『ーッテ』による集結について」『日本語教育』85号  
日本語教育学会 1995
15. 鮎澤考子「『話しことば』の特徴 — 聴解指導のために」『日本語教育』64号1988